



EDU-Portの問題と可能性： 調査研究結果から

京都大学大学院教育学研究科グローバル教育展開オフィス
高山敬太

@EDU-PORTシンポジウム

2021年3月9日

聞き取り調査から#1 (同省国際課元職員)

EDU-Port立ち上げに尽力した文部科学省審議官の思いを代弁して

- ▶ 「海外から見て日本の教育はどうか、ということを再定義することで、いままで無自覚に行われていた、エビデンスもなく、これが日本の教育だ、ここが良さだ、という慣行として行われていたことも含めて、可視化することが大切なんじゃないか」
- ▶ 「日本の教育も硬直化しているのではないか、文部科学省の初中等局の教育行政についても、硬直化と言いますか、発想に枠がかかっているんじゃないかと思っていらっしゃった」

聞き取り調査から#2 (同省国際課元職員)

「文化帝国主義への反省というのか、なかなか日本の良さを海外に発信するだけではなく、なんですかね、浸透させる、こう、文化的なことを海外の、しかも、学校教育等に入れこむ、ということに対して、恐らく文部科学省の職員にも、あと、まあ、そうですね政治家の方は・・・わからないですけど、なかなか抑制的なところがありまして。。。」

聞き取り調査から#3 (同省国際課元職員)

「担当事業室として事業者に口を酸っぱくして言っていたのは、その国の伝統や文化とかDNAにめちゃくちゃリンクしているので、日本の教育制度をまんまコピーアンドペーストしても絶対に上手くいかないですからね、そこだけは注意してくださいね、っていうのは言っていました。業者によっては、日本でやっていることをまんまコピーして素晴らしい、っていう人もいましたが、多分、日本型教育の海外展開っていうのはそういうことじゃなくて、その中で本質的なことっていうか、本質的でかつその国においても形を変えれば通用するもの、それは何かということをつかむ、だから、日本型教育が素晴らしいという言い方はミスリーディングで、日本の教育で生かされているものがその、中身を突き詰めないとEDU-Portの本質には至らない。」

聞き取り調査から#4 (同省国際課元職員)

(EDU-Portの目的について)

「最後は日本にメリットがあるからやっているんだと。最初は、日本の教育が海外で受けているから、それをどんどん展開するプロジェクトかと思っていたんですけど、でもそれではあまりいみがなくて。その展開する過程で、日本の教育に何らかのフィードバックするものが出てくるはずのなんです。」

聞き取り調査から#5 (EDU-Portステアリングコミッ ティメンバー)

「でも、教育っていうのは、鉄道とか新幹線とはちょっと違うので。非常に、あの、非常にタッチーというか、あの押し付けるものではないので。それと、文部科学省の役人の皆さんに、そういうものを輸出してカネ稼ごうという発想はないんです。文部官僚にはよくも悪くも金儲けしようという発想も、センスもないので。かつ、文科省としては（こういう事業は）面倒くさいことなんです。要するに手間ばかりかかって。で、そのリターンは、別に。文科省の予算が増えるわけでもないし。インフラ輸出に関しては興味がないんです。もちろん経産省はあります。官邸は興味ありますよ。で、私は経産省にいたので、その辺の感覚はあるんですけど。つまり、両方の感覚がわかる。」

聞き取り調査から#6 (EDU-Portステアリング コミッティメンバー)

「日本の教育はこんなにいいから、あなたたちやりなさい、というのは文化帝国主義ですよ。日本の教育を向こうでもやってみる、そこから問い直しが来て、自分たちとしても、あ、こんなところは優れているんだな、でもここは違うんだな、ということが鏡のように見ることが出来るわけです、他の国がやることで。それによって、日本の教育の在り方を問い直していく、これが文科省がこのプロジェクトをやるうえで一番大事なスタンスで、僕自身がこのプロジェクトに関わろうと決めたところです。」 (EDU-Portステアリングコミッティメンバー)

「やっと最近こういう考えが共有されるようになってきたかなーと」

文科省のEDU-Port ≠ 文化帝国主義

- ▶ 「押し付け」への戒め（要請主義）
- ▶ 日本の教育の問い直し（双方向の学び）
- ▶ 協働（水平な協力関係）

企業の市場開拓&インフラ輸出戦略から距離 ≠ 文部科学省的

×輸出&進出 ○展開

ビデオ：× ブランディング：○ 情報提供

EDU-Port=問い直し??

三大目標

- ▶ 日本の教育の国際化
- ▶ 親日層の増加
- ▶ 日本の経済への還元

数値目標？

EDU-Port成果

- ▶ 24か国において25件を支援。2017年度だけで相手国参加者が相手国参加者が15,000人
- ▶ 相手国の学習指導要領に盛り込まれる見込みなど、着実な成果が上がっている。
- ▶ 2018年度は、対象地域をアジアに加え、中東・中南米・アフリカにも拡大、コンソーシアム枠を新設（2018年度は昨年度に比べ、応募件数が約2.8倍）

文部科学省（2019）「日本型教育の海外展開推進事業（EDU-Portニッポン）2019年度予算資料」

日本の教育協力の「謙虚さ」

- ▶ 要請主義（≠理念主義）
- ▶ 「植民地経営、戦争などの失敗体験に基づいているのかもしれない。」
- ▶ 「旧宗主国に対してアンビバレントな感情を抱いてきたアフリカの人々にとってみれば、新鮮に映るようである。」(黒田 2010, p. 93)

黒田則博 (2010)日本の国際協力協力に関する自己認識—過去20年の報告書、論文等の分析から—国際教育協力論集 13(1): 83-95.

文部科学省の「伝統」

ただこの場合、援助を提供する日本の態度もじゅうぶんに先方の事情と意向をくんで謙虚なものでなければならない。戦後の教育再建にわれわれは貴重な経験を得ている。一国の教育は根本的には国民精神の基底に連なる国民自身のものである。このことをじゅうぶん自覚したうえで、われわれは可能なかぎり、援助の努力をいたすべきものとする。 (文部省調査局長 天城勲の発言、1962年)

斎藤泰雄 2019 「1990年以前の国際教育協力政策：逡巡と試行錯誤の軌跡」 萱島信子 黒田一雄 『日本の国際教育協力』 東京大学出版

国際教育協力の規範性(橋本 2019)

教育と援助：非対称性と価値判断の要求

→ 倫理省察、躊躇、逡巡

他者通じた自己認識

自己の同一化・肥大化 → 自己の普遍化と他者の特異性

自己の動揺：「自分の中に他者性が現れる」→ 逡巡

日本型から排除されるもの（否定性）の開示

肯定性と否定性は表裏一体

自己一元化・肥大化・普遍化：事業者A (民間企業)

「日本の学校教育が、戦後の制約の中で、今日に至るまでの間に培った、先人の努力の結晶なんだなって思いました。家庭科、給食、学習指導要領を通じてすべて食育に繋がっている、ここまで完成された仕組みを持っているのって、やっぱりすごいんだなって思いました」。

「日本の先生のやり方、授業の進めたかというのは、世界的に通用するようなスキルを持っているんだな」

→ 「欠如」した国々に日本の素晴らしい教育を普及

問い直しの兆し：事業者B（大学）

大学による日本型体育授業の海外展開

- ▶ U国の緩やかさ、自由、個性重視
- ▶ 気づき：日本の体育教育の規律性、協調重視→個性軽視（みんな同じ）
- ▶ 発見：音楽を使った準備体操の新鮮さ

自己（日本の優位性への信念）は動揺せず
規律訓練としての日本の体育への気づき

動揺→問い直し→自己変革：事業者C (NPO)

日本の公民館を持ってくる→エジプトに
そもそもあったものを「取り戻す」

日本の公民館の形骸化への気づき

なぜならば、これは日本だけの問題じゃない。われわれは、日本を見ている。ほかの国々のためにも見本であってほしい。と言われたときに、わたしはズキューンとしまして。ほかの国々が見本として見つめてくれているときに、日本の公民館はあぐらをかいている場合じゃないなと思いました。ちゃんとやっていてくれないと、私たちが真似しようとしたときに、いいものが残っていないじゃないかと。そう言われてしまうとですね、ちょっと宿題をもらったなと思いました（。。。）日本は日本で公民館のことを見つめなおして、今の時代にふさわしいものを作っていくべきだし、ほかの国が生かそうというときに、活かして貰えるようなものにしていかなくてはと思いました。

EDU-Port 2.0: 「日本型」国際教育協力に向けて

1) 倫理的要請に応える教育協力事業

肥大化の否定、問い直し、否定性、動揺、他者性

2) 途上国から学ぶ：近代化の諸問題（地球温暖化）

援助から協力の関係へ

3) 「学び」の事業として

- ▶ 事業者の省察と学びを促進・共有・蓄積
- ▶ 国内現場・行政に還元するメカニズム（制度レベルの問い直し）

4) 世界の趨勢（「ベストプラクティス」）に逆行する！

「日本型」国際教育協力